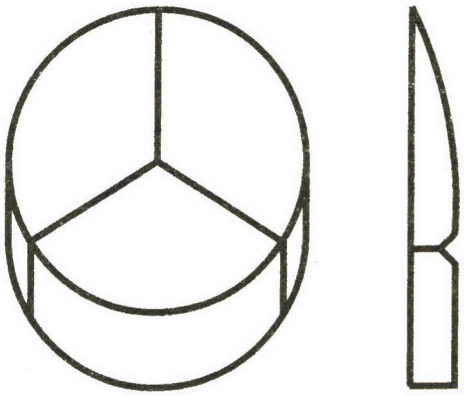
CRAZY JANE vol.11

問題



A君の誕生パーティーにB、C君が呼ばれ、バースデーケーキを食べることにしましたが、3等分に切り終えた時にD君が遊びに来ました。平等にケーキを分ける方法を考えなさい。ただし、ナイフを入れるのはあと1回のみ、ケーキは上下とも同じ直径の円柱形とします。

（1997年早稲田女学院中等科入試問題）

（答は15ページ）

□い メルヘン 金属バット
日熊研

CRAZY JANE vol.11

contents

表紙　マヌルねこ　1

フェミニスト歴史学者と反ポルノ運動――概観
リサ・ダガン［訳 市川恵里］　3

気がつけばホラー　荻野はるか　9

おーすけズ・ノート（97年4月23日）　三浦大介　9

ボディチェック　如月れい　11

女の月経、男の性欲？　青木哲也　13

表紙の問題の解答編　マヌルねこ　15

スノーレッツ誕生秘話　マヌルねこ　16

お楽しみ漫画クイズ―問題編―　マヌルねこ　18

From Editor Jane　20

クレイジー・ジェーン、司教と語る

W・B・イェイツ　訳／玉蟲

あたしは道で司教に会った
そうしてあれこれしゃべった
「おまえの胸も今じゃしなびて平べったい
血管もじきにひからびよう
穢らしい豚小屋を捨て
天のやかたで暮らすがいい」

「綺麗と穢いは身内同士
綺麗には穢いが要るんだよ」とあたしは叫んだ
「友だちはいなくなったけど　それは
お墓もベッドも打ち消せない真実さ
肉体の低みに落ち
心の誇りで学びとった真実さ」

「女は愛に夢中になっても
つんとお高くとまってられるけど
愛の神が館をお据えになったのは
排尿排便するところ
なんだって裂かれていなけりゃ
一人きりにも一体にもなれないものね」

フェミニスト歴史学者と反ポルノ運動――概観

リサ・ダガン［訳 市川恵里］

［一九九三年五月八日開催の「セックス・パニック――女性・検閲・『ポルノグラフィ』に関する会議」でおこなわれた後、New York Law School Law Review 38 (1993) に掲載された講演を改稿］

今朝は普通の歴史の授業をするつもりはありません。私がお話したいのは、反ポルノ法の立法化とその根拠となった政治的思想を、フェミニスト歴史学者たちが一団となって厳しく批判してきたのはなぜなのか、についてなのです。

一九八〇年代なかば、反ポルノ・フェミニストたちがポルノ的な表現の規制を狙った法案を起草し、制定にむけて運動を始めると、フェミニズム運動内に激しい分裂が生じました。反ポルノ派はそれまで、ポルノの女性嫌悪を解消するために検閲を利用することには反対する、とたびたび明言してきたのですが、ケンブリッジ、ロサンジェルス、ミネアポリス、インディアナポリスの各市で条例案を提出し、インディアナポリス市ではこれが条例として成立しました。あらゆる分野のフェミニストたちの間に、またいたるところで、この分裂が見られました。全米女性機構（NOW）の中で、レズビアン・フェミニストの間で、さまざまなフェミニスト学者の間で、敵意に満ちた猛烈な激論が巻き起こり、一九八六年か八七年ごろまでつづきました。そのころ、大方のフェミニストは、反ポルノ運動のためにこの種の法律を利用することには反対の意見をもつようになったのです。

けれどもこの時期でさえ――よく「セックス戦争（ウォーズ）」という痛烈な名で呼ばれていますが、正式な呼称ではありません――フェミニスト歴史学者の間で論争が生じることはありませんでした。フェミニスト歴史学者はほとんど一人残らず、例外なしに、この立法化戦略に反対し、その根拠となった政治的分析を批判しました。ほとんどすぐに、ジュディス・ウォルコウィッツ、エレン・デュボイス、リンダ・ゴードンといった著名な歴史学者たちが、なぜこうした戦略がフェミニズムにとって問題なのかを解き明かす文章を書きました。この論争の大きさと熾烈さとを思えば、こんな疑問が浮かんできます。なぜフェミニスト歴史学者の間では論争がなかったのか？　これは間違ったやり方だという点で、これほど広く意見の一致が見られたのはなぜなのか？

この反ポルノ法が、女性への暴力と闘う運動における歴史的達成として、またフェミニストにとっての法律上の突破口として提

出されたものであるとすれば、フェミニスト歴史学者たちの間にもせめて賛否両論あったのではとお考えになるでしょう。フェミニスト歴史学者たちは数十年にわたって、女性による改革運動——たとえば一九世紀から二〇世紀初頭にかけての禁酒運動や社会浄化運動のような——の再評価にたいへんな力を注いできました。彼女たちがこれらの改革運動を真剣にとりあげてきたのは、主流派の歴史学者や進歩的な男性歴史学者さえもがこうした運動をとるに足らない、滑稽なもの、あるいは単なるピューリタン的な厳格さとして扱ってきたやり方に異を唱えるためだったのです。フェミニストたちは、こうした運動の中で数々の深刻な問題が問われていたこと、その根源には真のフェミニスト的な怒りがあったことを示すために仕事をしてきたのです。ですから、一九八〇年代の反ポルノ運動とこれら過去の改革運動の間に類似性があるとすれば、しかもフェミニスト歴史学者たちがこうした過去の改革を人々に真剣に受け止めてもらおうと熱心に努めてきたのだとすれば、彼女たちはどうして八〇年代の運動にこうもそろって批判的なのでしょうか？

その答えは四つあります。四つの大きな問題点ゆえに、フェミニスト歴史学者たちは、こうした反ポルノ法という戦略とその根拠となる政治的分析に反対してきたのです。

第一の理由は、すり替えの問題です。まず歴史上の例を挙げ、それから現在の例を挙げて説明しましょう。一九世紀後半から二〇世紀初めにかけて、禁酒運動の用いるレトリックはほとんどの場合、家庭内での女性・子どもへの暴力や、酒場（サルーン）のような男性のみの社会的空間の問題をとりあげていました。けれども禁酒運動は、酒を禁止することに努力を集中したのです。飲酒をめぐって深刻な問題が起こっていたのは事実ですが、酒を禁止すれば女性・子どもへの暴力の問題を解決できるとか、男性のみの社会的空間をなんとかできると考えるのは、まったく間違った、本道から外れた戦略です。社会的・文化的なタブーがあったために、真の問題に対してじかに攻撃をしかけなかったのです。その代わり、目標はすり替えられ、酒を禁止する運動にエネルギーが向けられました。結局のところ何の効果もない、非生産的な政治戦略でした。フェミニスト歴史学者たちはこうした運動をつぶさに見てきたからこそ、反ポルノ運動を見たとき、即座にそこにも同じようなすり替えがあるのに気づいたのです。

もっと最近の例として、一九八四年にニューヨーク州サフォーク郡であったことを見てみましょう。マッキノン＝ドウォーキン条例案をもとに作成した反ポルノ条例案（イニシアチブ）の採否についての公聴会が開かれたときのことです。この国民発案は、右翼の人物が組織してきたもので、たいそう右翼に支持されていました。私はこれらの公聴会に行ってみましたが、人々が証言しようと群がり列をなしていました——しかも証言した人の五〇パーセント近くは男性でした。彼らは罪を告白しに来たように見えました。マイクの前まで来ては、自分は妻を殴った、娘をレイプしたと告白するのですが、そうなったのもみなポルノのせいだと言うのが常でし

た。彼らはよくこんな言い方をしました。「ポルノが家の中に入りこんできて、私にそんなことをさせたんです」。そんなわけで、こうした問題の解決策は、虐待された女性のための避難所（シェルター）をつくることでも、レイプと性的暴行をより積極的に訴追することでもないのです。彼らが持ち出す解決策は反ポルノ法なのでした。彼らは自らの暴力行為を告白するものの、自分に責任があるとは思いません。自らの行為の責任をポルノに転嫁したのです――禁酒運動をくわしく見たことのある人にはすっかりお馴染みのやりくちそのもので。家庭内の状況に対するフェミニストの怒り、女性たちの怒りは、反ポルノ法を求める運動へとすり替えられてしまったのです。

フェミニスト歴史学者たちが反ポルノ法に反対する第二の理由は、保守派と手を組むことと、その影響の問題です。歴史上の実例としては、合州国と英国の社会浄化運動があり、これらは一九～二〇世紀への世紀転換期に、反売春法の強化に役立ったのでした。反売春法を強化する運動に携わっていたフェミニストたちは、都市の若い女性たちが経済的・性的に弱い立場にあることを気にかけていました。けれどもこうしたフェミニスト運動家たちは、道徳を強いることを――女性を守ることではなく――目標とする保守派と手を組んだのです。保守派の方が、こうした運動に参加するフェミニストたちより大きな社会的・文化的・政治的力をもっていましたから、最終的に法を形づくり、その施行の仕方を定めたのは保守派でした。こうして社会浄化運動におけるフェミニストと保守派の同盟関係（これについてはジュディス・ウォルコウィッツが広範囲にわたって書いてきています）のせいで、彼女たちのエネルギーは売春をなくす運動へとそらされてしまったのです――女性たちにもっと経済力と社会的な力を身につけさせるうえで実効性のあることをするのではなく。

保守派と手を組んだために、せっかくの努力が誤った方向へそらされてしまうことがあるという現代の例を、一九八四年のインディアナポリス市に見ることができます。インディアナポリスでは、アンドレア・ドウォーキンと共同で反ポルノ条例の原案を起草したキャサリン・マッキノンが、この条例案を可決させるために、ERA（男女平等憲法修正条項）阻止運動をしていたビューラ・コグナーと協力したのです。マッキノンは「モラル・マジョリティ」の事務局長であったグレッグ・ディクソン牧師とも協力しました。こうして、圧倒的に共和党員が多い市議会で、この「フェミニストの法律」は可決されたのです。地元ではフェミニストや黒人政治家、ゲイ・コミュニティ、市議会の少数の民主党員らがこれに反対しました。ところがインディアナポリスでの出来事に関するマッキノンたちの報告を見ると、自分たちは保守派と連合するつもりはまったくなかったと主張しています。これはフェミニストの法律であり、フェミニストの運動だったのだと彼女たちは言うのです。しかし、フェミニストの反ポルノ運動が右翼と協力したことは一度もない、などという言い分は、ビューラ・コグナーの動機をフェミニスト的なものと解釈し直さないかぎ

りは成り立ちません。このような解釈は――穏やかな言い方をしても――こじつけです。かくして、保守派との、あからさまに反フェミニズム的で女性嫌悪的な課題を掲げる保守派との協力という同じ問題が、再びもちあがったのです。この問題は、反ポルノ法のつくられ方、意味、受け取られ方のみならず、この法律がどのように施行され、どのように裁判官たちに解釈されるかということにも関わっています。

この問題は、フェミニスト歴史学者たちが反ポルノ運動や、他の同様な立法化戦略を批判的に考える第三の理由につながります。こうした法的措置は、女性にとって有害なことがあまりにも多いからです。先ほど述べたばかりの反売春法の適用の実態は、一段とひどい例に入ります。こうした反売春法は、もっぱら女を罰するために機能したのです。これらの法の下に女たちは逮捕されました。男たちではなく、女たちがこれらの法によって苦しめられたのです。しかもこれらの法は、結局、都市の女たちの生活をますます危険で困難なものにしただけでした。最近の例としては、カナダの裁判官が猥褻法を再解釈する際に、マッキノンが協力したケースがあげられます。この「フェミニスト的」解釈の下に最初に告発されたのは、レズビアンの出版物でした。過去の例としては、社会浄化運動とアンソニー・コムストック［訳注1］のような人物らが法律をつくるために協力したケースがあります。こうした法はマーガレット・サンガー［訳注2］を迫害する結果になりました。反ポルノ運動はある意味で、猥褻は危険だという考えを誘発し、正当化するのに力を貸したのです。ごく最近、そうした考え方から、NEA（国立芸術基金）が数人のレズビアン、ゲイ、フェミニスト・アーティストへの資金援助を打ち切ることになりました。

フェミニスト歴史学者がそろって反ポルノ法戦略を批判する第四の理由は、こうした戦略の根拠となった歴史的分析に関わるものです。つまり、ポルノは女性嫌悪（ミソジニー）と女性に対する暴力を惹き起こす原因だという考えです。このような議論には歴史的な根拠がまったくありません。なぜなら、第二次大戦後にポルノが大量に流通するようになったことが原因で、暴力と女性嫌悪が惹き起こされたはずはないからです。暴力と女性嫌悪は何世紀にもわたって存在してきたのですから。このような議論は、どんな文化にもあてはまる主張とは言えません。性的にあからさまな表現物を禁じている社会で――それがユタ州であれサウジアラビアであれ――女性の地位が高くなるわけではないからです。性的にあからさまな表現物の禁止と女性の地位の向上との直接的な相関関係はまったくありません。そんなわけで、きわめて機械的なレベルでも、どんな文化にもあてはまる、歴史的根拠のある主張というには、ポルノを原因とするこうした分析はあまりに単純すぎるのです。

だからといって、女性嫌悪とポルノ、あるいは性的にあからさまな表現物などどうでもいいとか、批判すべきでないとかいうわけではありません。批判した方がいいに決まっています――私た

ちがテレビや小説、広告の中の女性嫌悪を批判し、反対運動を組織するのと同じように。しかし、「小説に反対する女たち」というグループを組織するのは、「ポルノに反対する女たち」というグループを組織するのと同じくらい理屈に合わないことです。私たちは性的にあからさまな表現物の中にある女性嫌悪に反対しているのです。性的にあからさまな表現物それ自体に反対しているのではありません。

結論として私が言いたいのは、こうしたことはいまもなお、私たちにとってきわめて身近な問題だということです。一九八〇年代や、一九世紀後半から二〇世紀初頭だけの話ではないのです。新たな試みが――ポルノグラフィ犠牲者補償法から地方の国民発案（イニシアチブ）まで――たえず出現しては、性的にあからさまなイメージおよび言論を規制・禁止しようとしています。私たちの戦略においては、性的にあからさまであることの問題と、女性嫌悪の問題、暴力の問題とを注意深く区別する必要があります。また、私たちが何気なく暴力という言葉を投げかけるときに、どういう意味で使っているのか考えなくてはなりません。なぜなら、多くの合意の上でのサドマゾ的なイメージさえもが「暴力」と呼ばれているからです。区別することが必要です。何が性差別的で何が性差別的でないかについても、必ずしもみんなの意見が一致するわけではありませんから、それについても話し合う必要があります。私たちは政治的分析において、また法律制定の試みにおいても、きわめて慎重にこうしたもろもろの区別をつける必要があるのです。そうしないと、私たちは現在――そして過去一度も――女性やフェミニストのためになったためしのない右翼の試みに吸収され、彼らと手を組む結果に終わってしまうからです。

［訳注1］コムストック（一八四四―一九一五）猥褻物取締に力を注いだ米国の社会改革者。コムストック法を成立させ、避妊具や避妊・中絶に関する情報さえ「猥褻」として取り締まった。

［訳注2］サンガー（一八八三―一九六六）産児調節運動の指導者。

Lisa Duggan, "Feminist Historians and Antipornography Campaigns: An Overview" in Lisa Duggan and Nan D. Hunter, *Sex Wars: Sexual Dissent and Political Culture* (Routledge, 1995).

【訳者解説】

リサ・ダガンは、ニューヨーク大学のアメリカ研究プログラムでレズビアン／ゲイ・スタディーズや、ジェンダーとセクシュアリティの歴史を教えている学者＝アクティヴィスト。ドウォーキンとマッキノンを中心とする反ポルノ法制定運動に対抗するため一九八四年に結成された Feminist Anti-Censorship Taskforce（FACT、検閲に反対するフェミニスト特別委員会）の創立メンバーでもある。

八〇年代米国のフェミニズム界で熾烈を極めた「ポルノ論争」の経緯とフェミニスト間の対立については、かつて別のところで書いたことがあるので（『インパクション』84号所収「フェミニズム、検閲、ポルノグラフィ」）今回は省略させていただく。いずれにしても、ドウォーキン／マッキノンらの反ポルノ法は連邦最高裁でも違憲判決が出されて法的には失敗し、フェミニズム界においても結局大方のフェミニストの支持を得ることができなかった。米国社会に蔓延する女性への暴力をなんとかしたい、という切実な動機から生まれたものだとはいえ、この法律の内容はあまりに問題が多すぎた。リサ・ダガンはＦＡＣＴの創立メンバーとして、この反ポルノ法の欠陥を早くから指摘し、精力的な反対運動をおこなってきた。ナン・Ｄ・ハンターとの共著 Sex Wars に収められたいくつかの文章の中でも、反ポルノ運動に対し激しく的確な批判をおこなっており、読みごたえがある。

ここに訳出した文章（もとは講演）は、一九九三年の時点から、過去の反ポルノ運動と、それに対する（自らも含めた）フェミニスト歴史学者たちの反対をふりかえって、整理したものである。どんな分野のフェミニストであれ、反ポルノ運動に対してはたいてい賛否両論巻き起こったというのに、フェミニスト歴史学者たちはそろって反対に回ったというのがおもしろいし、それは彼女たちが過去の歴史をよく知っていたからだとして、米国の禁酒運動や英米の社会浄化運動と現代の反ポルノ運動との共通性を指摘しているのが興味深い。女性への暴力という真の問題にじかに取り組み、その解決に本当に有効な方策を考え、それに努力を傾けるべきところを、「酒」もしくは「ポルノ」といった攻撃しやすい特定の「モノ」だけをとりあげ、「諸悪の根源」視して全力で禁止運動に走ってしまうという「すり替え」のメカニズムがあぶりだされる。

あるいはフェミニストと保守派との結託の問題。保守派やファンダメンタリストがドウォーキン／マッキノンの反ポルノ法を積極的に支持したのは、「フェミニスト的」考えからだと信じる者などいないだろう。彼らは「道徳」の立場から、あからさまなセクシュアリティ（とりわけ女性のセクシュアリティ）を封じ込めたいだけなのだ。そのためのレトリックに「フェミニズム」の言説が利用されていく。こうした事実をしっかりと認識する必要がある。目先の利益のために保守と手を組むのは自滅行為に等しい。とりわけ保守化の流れがますます強まりつつある日米両国の文化・政治状況において、真に有効な抵抗のあり方とは何なのかをよく考える必要があるだろう。「私たちが反対しているのは、性的にあからさまな表現物それ自体ではなく、そこに表現された女性嫌悪（ミソジニー）なのだ」という原則は重要だし、忘れたくないと思う。

最後に、原文には大量の註（テキストよりページ数が多い）がついているが、ページの都合＋訳者の体力・時間不足のため訳出できなかったことをお詫びしたい。興味をもたれた方はぜひ原書を参照してほしい（Routledge の本なので入手しやすい）。

気がつけばホラー

荻野　はるか

もう三ヶ月以上前の話になる。一月の末に一通のダイレクトメール（ＤＭ）が私のところに届いた。窓空き封筒の脇には大きな文字で書かれた強烈な一文があった。

「今年こそ変わろう。
と、最初に思ってから、
何年たちました　か。」

このＤＭの主は、「日経ビジネス」。言わずとしれた、あのビジネスマン情報誌の購読勧誘のメールだった。

何で、よりによって私の所にビジネスマン対象の雑誌の勧誘がくるわけ？いったい、どこから私の住所の情報を知ったわけ？頭の中を疑問符が山のように飛び交った。

普段なら、ＤＭのたぐいは殆ど中身も読まないまま、捨ててしまうのがオチなんだけど、今回はあまりに不自然なところから（自慢じゃないが、私は日経はもとより、ビジネスマン雑誌というものはこの一年、一冊も買ったことがない。ついでに、時事雑誌なども最近はとんと買ったことがなかったので、相手にとっては顧客になりようがない人間だ。）来たのと、封筒の扇情的なコピー（あおり文句）にかなり不快感を覚えて、封筒はもとより、中身まで全部読んでしまった。

それで分かったことがいくつかあった。

実は、私は二年ほど前に「日本マ〇パワー」というところの通信講座を受けていたことがあり、情報提供の主はここだということが書いてあった。私が受けていたのは、国家試験がある某講座だったのだが、このときは三分の一ほど添削を受けただけで、途中で挫折したという苦い体験がある（当然、試験そのものも受験しなかった）。

ということを前提にして、もう一度最初に書いた封筒のあおり文句を読み返すと、結構怖いでしょ？私は心の底から怖かった。だって、「日本マ〇パワー」から伝えられた私の情報は、単に住所だけじゃないってことになるんだよね。最初のあおり文句はどうしたって、講座を真面目に受講し終わって見事国家試験をパスした人向けのものじゃないよね。そういった人たちに送るＤＭは「ビジネスの最前線で活躍されるあなたへ－あなたに必要なのは、激動の時代を乗り切るための情報とその活用方法です。」といったかなり肯定的なものになるはず。と、考えていくと、伝えられた情報は、少なくとも、私が

●おーすけズ・ノート（九七年四月二三日）

その日の夕方、
公共放送のラジオのニュースを聞いた
大使館のとなりの教会の鐘が鳴っていた
ぼくにはこう聞こえた
テロリストが死んでよかった、
テロリストが死んでよかった

キャスターが不器用な活舌に力をこめて
あれやこれやと論評した
話をはじめるまえに（儀礼として？）
ペルー人の三人の死者の冥福を祈った
――最高裁判事と、特殊部隊のふたりの兵士と
（しかし、日本人の人質が無事でよかった！）
なるほどね、彼にとって
冥福を祈らなかった武装グループの十四人は
たぶん人間ではないのだろう

いやな気分だった
サッカーをしていて射殺されたゲリラたちは、たぶん
死ぬかもしれないと覚悟して大使館に来たのだろう
その意味では戦闘員である彼らの
（そして特殊部隊の兵士たちの）
戦いの場での死は、
それほど意外なことではないのかもしれない
でも、いやな気分だった
キリスト教でも仏教でも（少なくとも本来的には）

向上心（「今年こそ変わろう」）を持っているけど、過去に目標に到達できず、苦い記憶を持っている人間（「さいしょに思ってから何年たちましたか」）であるということが読みとれるほどの内容だったということになる。具体的に考えてみると、講座途中で添削を提出しなかった者、国家試験の結果の通知アンケートをこの会社宛に送らなかった者（合格すれば途中で添削講座を挫折しても多くの人はその結果を伝えるだろうから）というような条件のもと抽出された情報が日経ビジネスに渡り、その中に私も入ってたということだろう、きっと。

昔からＤＭについては、個人の情報が他の業者に転用・売却される結果、個人のプライヴァシーが侵害されるという観点から、問題にされてきた。私も頭ではそうしたことを理解しているつもりだった。だけど、「プライヴァシーの侵害」ということばでは収まりきらないものの正体を私は垣間見たような気がする。

このＤＭを見て恐怖に駆られたのは、そんな情報まで、私の知らないところでやりとりされているのか、そして無数の企業が「私」という個人を確実にカテゴリー化して、本人の知らないところで勝手な「私」像をつくっているんだっていう驚きから来るものではある。でも、それ以上に、情報を駆使して対象を絞り込み、その結果出されたコピーが確実に読む側の心に食い込んでくる、その恐怖だ。心に食い込んできた、ということは、送り手が相手の心にそのメッセージを確実に伝えることに成功したということだ（ビジネス用語でこれを「ヒット率を高める」というらしい）。少なくとも私は普段読まないＤＭを全部読んだ訳だし、一瞬だけど「ぐらり」とした自分を知っている。

こうした受け手の感情の機微まで知り尽くした上で、送られてくるＤＭを「便利なもの」として考えるのか、それとも、人の感情までも作り出していくいわば「心体改造を迫る不気味なもの」と考えるのか、とても難しいところだ。

世の中はインター・ネットとか、とかく自分に必要な情報を、いかに確実に大量に取り込むかに血道をあげている時代。そんな時に、こんな風に感じているのは、ちょっと遅すぎの感もある。しかし、少なくとも私は、『ヴィデオドローム』（あのマスター・オブ・カルト、クローネンバーグ監督の映画）真っ青の現実にはいまのところついていけそうにない。

あっ、ちなみに私は今回の誘惑には乗りませんでした。だって、同居人が買ってるからね。情報はそこまで行き渡ってないってことねと、ちょっと一安心。でも、この三ヶ月で、今まで手にとって読んだこともなかった「日経新聞」や「日経ビジネス」を毎日（毎週）きちんと読む習慣がついてしまったことに気がついて、一人、愕然とする今日このごろ。

死者はひとしく人として遇されるべきものだったと思う
そうした世界宗教にはほど遠い日本のカミ信仰にさえ
戦いで殺した敵を祀る習俗があった（もっとも、これは、
あとで祟られるのが恐かったからしいけど）
このキャスターは（少なくともお仕事中には）
ある人たちを人間のカテゴリーから外して
人の死を悼むのをやめることができるらしかった
これから当分のあいだメディアで
そうした語り口の洪水を見聞きすることになるだろう

ペルーについては、
メディアが語る以上のことはほとんど知らない
そこに住んでいるいろいろな人たちについて
もっと詳しく知る機会があるかどうかもわからない
ぼくのいやな気持ちを、具体的な
政治や運動のことばに置きかえる気もない
ただ、はっきりいえるのは
あのキャスターのとなりには座りたくないということ

ゲリラは赤子の手を捻るように大使館を制圧したらしい
特殊部隊は蝿叩きで蟻を打つようにゲリラを射殺したらしい
湾岸戦争のときの吐き気がよみがえる
必要なのは「危機管理」？
私たちが自分の手でゲリラを撃ち殺せるようになること？
いずれにせよ日本人はみんな無事で
「敵」は全員死んだんだ
どうして提灯行列をしないの、あんたたちは

（三浦　大介）

ボディチェック

如月　れい

このところ身体が重い……と思っていたら、友達から「太った?」と言われて愕然。やばいやばいと自覚していたのに、ストレスのための暴飲暴食。どんどん太っていく……おそるおそる体重計に乗ったら、がーん！　ベスト体重の五キロオーバー。おまけに、買い物しているときに、すっと背を伸ばしたところ、背中の肉がむぎゅっとベルトの上にたわんだ。

なんかみじめ……『淋しい女は太る』だっけ？　なんかそんな本もあったよな……とか、思い出したりして。去年あたりからお肌の衰えも感じてる。恋人募集中の身にとっては、こりゃ深刻。二十歳まではぽっちゃりしていたあたしだけど、その後はずっと細身を保ってきた。美人じゃないけど、脚が細いことだけが自慢だったのに、スリムのジーンズをはいたらふくらはぎのところがぱんぱんになっている。

もうだめだ。ダイエットするっきゃない！

そこで生まれて初めて本格的ダイエットに挑戦した。マツモトキヨシに走り、ダイエット食品をじっくり吟味。「どれが効果あるんだろう……」。そこで見つけたのがオオバコダイエット食品。オオバコはお腹の中に入ると水分を吸収して膨らむので、食が細くなるのだという。これだ！　効果があるかないか分からぬものを飲み食いするよりも、オオバコに胃の中を占領されることで「満腹感」を得るというのは、物理的にも納得できる。

顆粒のオオバコと低カロリーのコンニャク食品をどっさり購入。ダイエットでお肌がかさかさになるという話も聞いていたので、ビタミン剤と野菜を粉末にしたスープも必需品。ついでに減脂茶というのも買ってみた。店員に勧められるがままに胃腸薬も……オオバコは「お通じが悪くなる」のだとか。

さて、万難排してダイエットを敢行！　それと同時に、自分の生活パターンを振り返ってみた。なによりも、このところさっぱり運動をしていない。エアロビクス講座も申し込んだきり、さぼってばかり。ゴルフもテニスもしてないし、仕事が忙しくて散歩すらろくにしていない。(忙しくなると、食べることしか楽しみがなくなるのでますます太ってしまう……。)

それにしたって、過去十数年、今とさほど替わらないペースで暮らしてきたのに、どうして急にどんどん太りだしたんだろう？

そこで、はたと膝を打った。

あ、セックスしていないからだ！

そうかぁ、なるほど。わたしのセックスは時間も体力も使うから、あれが運動替わりになっていたに違いない。それがこのところの男ひでりで、さっぱりぜんぜんのセックスレス。それに気付いて、そうかわたしは「セックスレス太り」していたのだと一人納得してしまった。

セックスレスというと、思い出すことがある。某所での女性たちの集まりで、ある女性が「うちってセックスレスなんです」と発言したとき、わたしの友達がのたもうた。「足んないなら、自分ですりゃええやんか」

あのひとことには、まいった。そして、なるほど、とも思った。いわゆる一人エッチ、マスターベーション、オナニーというやつ。そうそう、そういえば最近、そちらもさっぱりいたしてなかった。

セックスをするときれいになると言われるが、あれって本当だと

思う。まあ、やりかたにもよるだろうけど、わたしの場合は間違いなく新陳代謝がよくなる。なぜって、興奮するし、汗もかく。カロリーも消費する。筋肉も使う。自分から積極的に動くし、ときに激しい動きもするし、相手にきれいに見てほしいからお腹は引き締め、背はそらし、身体中をしならせ……緊張感のとぎれない「忙しい」(決して「せわしない」という意味ではない)セックスがわたし好みなのだ。

そうさ、相手がいないなら、一人エッチしよう!

思い立ったが吉日、久々に(本当に久々に……)取り組んだ(んな、おおげさな)。

ところが……なかなか興奮できない。なにしろ、好きな男の一人もいないから、思い浮かべる顔も身体もない。うーん、どうしよう。エッチな本を漁ってみる。ところが、いいかげんその手の本を読み飽きたあたしの頭脳のシノプシスは、並み大抵のものには反応してくれない。ポルノはもともと大嫌いだが、女性のエロティカも食傷ぎみでパターンが見えてしまう。どうしよう……うーむ、あーん、したいよー、イキたいよー……だめだー、ぐすん。

しかたがないので、伝家の宝刀、大人のおもちゃを取り出す。わたしの持っているのは、アメリカは西海岸の女性アーティストが作ったという、造詣的にも美しい最高級シリコン製のやつ。女性専用のセックスブティックで扱っているしろものだ。他に、電池で震えるタマゴ型のなんとかパールというのもある。いざ使おうとしたけれど、なんか、しらけてダメ。なかなか、その気分になれない。

うーん、惜しいなあ……自分一人で(も)いっぱいイって楽しんでいた日々がなつかしい。年、取ったのかしら。鏡の中の自分の裸が醜い。ああ、いやだ。やっぱりできない……。

ダイエットを開始してから二週間後、シャワーを浴びた後に大鏡で素っ裸を観察。うん、上出来! まだちょっとお腹がたるんでるけど、これなら満足、合格点。無事、ダイエットは成功した。

で、お肉の厚みを試そうと鏡の前で自分の身体をあちこち触ってみた。お腹の線、これくらいならかえって女っぽいわよね、とか、背中の肉が消えたぜ、やったぜ、とか、しどけない肩の線に戻ったわー、いいじゃん、とか、感無量。「よく成功したよなぁ」と満足して、そうやって自分の身体を触っていたら、ふと、自分の腰の線に色気を感じた。「う……このナルシストめ!」

自分でも呆れながら、鏡を覗きこんで背をしならせてみる。(けっこう色気、あるやんか?)自分の身体に手をはわせる……うーん、たまらない、この感触。しなやかな(と、あえて、自分を誉める)肩の線にすっと指でなぞる。ぞくぞくした。おもむろにローション(んなもんも持ってる、「好き」なあたし)を取り出して、身体中に塗っていく……滑らかな感触がこらえきれない。ああ、いいわー……。

結局、しっかり一人エッチをしてしまったのである。終わってから鏡の中を見ると上気した肌がつやつやしてる。やっぱりエッチっていいわねー!

細身に戻ってつくづく思ったのだが、どうやらわたしは自分の身体に満足し、自信をもっている時こそエロティックな気分になれるらしい。まさにナルシスト、それ以外のなにものでもないと自覚した。だけど、なにも悪いことはない。誰にも迷惑をかけるわけじゃない。

人はそれぞれ自分のボディイメージを持っていると思う。それが「いい」か「悪い」かで、もしかしたら性的な感度は変わってくるのではないだろうか。わたしはエッチが好きだから、いいボディイメージを持っていたい。いいボディイメージを持っていさえすれば、セックスレスだって(自分で)解消できるもの。

気分はきらきら、春まっさかり! スリムのジーンズのふくらはぎも、前にもましてすかすか……やったぜ、これでこそわたしだい!

軽やかに、しなやかに、たおやかに……!

そしたら、ひとつ、ふたつ、恋らしきものも風に運ばれてきた。

ダイエット万歳! エッチ万歳!

女の月経、男の性欲？

青木哲也

「月経」は女の特権？

もう前々号になるが、「月経特集」の記事は、女性のみならず、多くの男性にとっても極めて興味深くかつ有益な内容だったと思う。ぼく自身、あれを読みながら「へえー、そうなのか」「女って大変なんだなあ」と思うことしきりだった。何しろほとんどの男性は「月経」についてたいした知識を持っていないだろうから無理もない。

ただ、その一方で、ぼくはあの記事を読んで何やらとても悔しい思いをしたことも事実なのである。「月経」という現象が男性にない女性特有のものだけに、あの場で繰り広げられている「月経について話す」ということ――ナプキンやタンポンや鎮痛剤について情報交換をしたり、生理中の痛み・不快感について共感しあったりするということ――に自分が加われないことに癪な思いをしたのである。もちろん、女性たちは何も好き好んでそのような痛みや不快な思いを毎月体験しているわけではないんだから、悔しいと思うのはお門違いであるということは分かっている。ただ、「月経」は男には体験したことないから、男がいくら理解につとめたところでも、たとえば極端な場合、「男には分かるわけないでしょ」と言われてしまえば、返す言葉がない。「月経」がそのような意味で女性のいわば「特権」的な領域にあることに少し居心地の悪さを感じたのかもしれない。

それでは、男にはそのような「特権」的な領域はないのだろうか。特集記事の男性編アンケートの最後にも《女の人と月経の関係のようなもの、否応がなくお付き合いしなくてはいけない生理的・身体的現象というようなものが男性にはあるんでしょうか？》とある。

男にとって「否応がなくお付き合いしなくてはいけない生理的・身体的現象」とは何か？――ここではこの問いについてぼくなりに考えてみたい。

「溜まる」「抜く」という現象

中学校の保健体育の教科書には、第二次性徴期を迎えたときの現象として、女性の初潮・月経、男性の夢精・精通が記述されている。そこで、少し「夢精」について触れておこう。言うまでもなく、「夢精」とは睡眠中の無意識な精通（射精）のことである。性的な夢を伴って起こることが多い。目が醒めた後で汚れてしまった下着をどうするか、という極めて切実な現実の問題に直面することになる（結局のところ親に隠れてパンツを洗ったりするはめになる）。

この「夢精」という現象は、たいていの場合は思春期を過ぎてもいつまでも起こるものではないし、そもそも、ぼくの友人にはまったく経験したことのない人もいるくらいである（ぼくは中学一年のとき二三回経験したように記憶している）。だから、男にとって「お付き合いしなくてはいけない」ものとは到底言えるものではない。

それでは、あらためて、男にとって「否応がなくお付き合いしなくてはいけない生理的・身体的現象」とは何か？

実は、これは何人もの男にわざわざ訊き廻るほどの質問でもない。たいていの男は、口ごもったり、薄ら笑いを浮かべたりしながらも、同じようなことを言うに違いないから、である。ずばり言えば、それは性的な欲望だろう。いわゆる「（精液が）溜まる」そして「（精液を）抜く」という行為と、その行為への衝動である。

ぼくはあるとき、ある女性と話していて、話題が女性の生理のことになったときに「女って大変だなあ、男にはそういうのないもんなあ」と言ったら、「男だって大変じゃないの、溜まるとかいうし」と言われたことがある。それくらい、この「溜まる」「抜く」という表現とそ

の意味するところは、男女にかかわらず広く知られているのだろうし、「溜まる」→「したい」→「抜く」という一連の現象は、女性の「生理」（月経）に対する、男の「生理」なのだ、という言い方すら珍しくないようにさえ思える。

「溜まる」「抜きたい」というのは男の「生理」なのだ――このような言い方に嫌悪を感じる女性もいるだろう。ぼくも「溜まる」「抜く」という表現は好きではない。あまりにもあけすけで即物的であり、想像力の入り込む余地がない（したがって官能のかけらも感じられない）し、男がなにやら機械的で単純な動物に思えてしまう。しかしながら、この表現が意味するところは、男であるぼくには実感を伴ってとてもよく分かる。ぼく自身、ときとして「機械的で単純」に「抜く」ことができてしまうし、それはあたかも男の体にあらかじめ仕組まれた「生理」のように感じてしまうからである。

そうした「抜きたい」「やりたい」というひたむきな欲望というは、その人によって、また同じ人でも時と場合によって、程度の差もあり、その対処のしかたも（単に我慢するとか、セックスやオナニーで充足しようとするなど）、さまざまだろう。しかし、いずれにせよ、性的な欲望というのは一回充足すれば解消するというものではなく、常に自分についてまわるものだから、多くの男にとって極めて現実的な問題には違いない。

そのような意味では、性衝動とその充足は、男性が「否応なくお付き合いしなくてはいけない身体的現象」とは言えそうである。

性欲は男の生理か？

しかしながら、そのような性衝動が男性特有の現象かというと、必ずしもそうは言い切れるものではない。もちろん女性にも性的な欲望は存在するからである。特に、この数年のことだが、女性もオナニーもするというのは、かなり公然の事実となってきたように思う。それは、レディースコミックなどの女性向けのポルノ雑誌や女性向けのオナニーグッズが驚くべき売れ行きを見せていることからもそれは明らかだろう。かなりの数の女性が（もちろん人によって、また同じ人でも時と場合によって程度の差はあるだろうが）男性と同じように性的な欲望を抱え、男性と同じようにその対処に煩わされているに違いないのである。

男女の性衝動に差がないのであれば、男性のみが特権的に性的な欲望を振りかざすのは、実におかしなことである。特に、先に述べたような、女性の月経の代わりに男性の性欲があるという言説は、まったくもって女性にとってアンフェアと言うしかないだろう。

小倉千賀子の言うところによれば、男は女と比べて圧倒的に性欲が強く、性行動を抑え難いというのは、日本の性教育が教えてきた差別的な幻想にすぎないという。《（日本の性教育において）男の子の性欲が女の子のそれとは違うのだという幻想が叩き込まれます。》《男の子のマスターベーションは、生理的なしくみからいって当然ガマンできないものである。と女の子はマジに思うのです。男の子自身も本気でそう思うのです。これに対する批判というのが、今のところほとんど出てきていないのは不思議なことです。男の子は精液が自然にタマッてきて、セックスをしないと我慢できないんだという通説の一方で、タマりすぎて破裂して死んだという話を、私は聞いたことがありません。》（『セックス神話解体新書』学陽書房）

実のところ、男であるぼくとしてもこのように言われると、先に述べた「溜まる」「抜く」という言葉の意味するところが、生理的な現象でもなんでもなく、ただ男の欲求を押し通すためのエクスキューズにしかすぎないように思えてくるのである。（ちなみに、引用文中最後にある、溜まりすぎると死ぬということはもちろんなく、実際は夢精をするらしい。何か月もにわたる修行中、性的な行為を一切禁じられていたオウム信者はそう語っている。）

それでも疑問は残る――。男の性欲はやはり女のそれより強いのではないか？　男と女の性衝動の発動のされかたは違うのではないか？

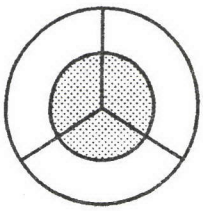
結局のところ、男と女の両方を体験した人はいないのだし、そういった問いに明確に答えられる人は誰一人としていない。

また、そもそも性というのは個人差の世界であり、一人ひとりの個があるのみである。ぼくは男女を含めて多くの人にいろいろ訊いて廻りたい気がしている。

†表紙の問題の解答編† （解答作成・マヌルねこ）

さあ皆さん、できましたか？　下記のように答は１つではありません。これを機に柔軟な思考力をさらにみがいて、今後の社会活動・フェミニズム運動に役立てましょう。

【解答１】

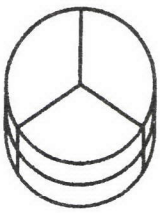


図のように、半径の２分の１のところをナイフで丸く切り、まんなかを１人分として４人で分ければ同じ分量のケーキが行きわたります。別に直線に切る必要はないのです。ただし、実際問題として１回で円形に切るのはむずかしく、ケーキがグチャグチャになるおそれがあります。一番きたなくなったケーキはD君にあげましょう。

【解答２】

図のように切ればまさに平和的解決になります。え？　平等ではないって？　物理的な平等だけが真の平等ではないことをあなたは学ぶべきです。みんなが同じものを同じだけ持っているからといって、本当に幸せですか？　要は心の問題です。小さい２切れは当然A君とD君で分けます。それがホストのつとめですから。D君も気の利く子供であれば自分のせいでA君のケーキが小さくなったことをすまなく思い、そのまま帰るかもしれません。そうすればしめたものです。

【解答３】



水平にナイフを入れて６等分にし、４人で食べたあと、残りの２切れは冷蔵庫に保存し、A君が翌日のおやつに食べます。結果的にA君が２分の１食べることになりますが、その場の平等が取り繕われればいいのです。B、C、D君もこんなセコいケーキのことであとからとやかく言ってきたりはしないでしょう。

【解答４】

ケーキを隠す。これなら全くナイフを入れなくて済みます。そして適当にD君をあしらって早めに追い帰したあと、３人でケーキを取り出して食べましょう。

【解答５】

ケーキではなくD君にナイフを入れる。そもそも、アポもなしに、いきなり他人の家に、しかもパーティーの最中に来るような、ＭＲＴＡみたいな子供は刺されても文句は言えません。これがもしアメリカやペルーだったら即射殺です。しかし一番大切なことは、幾何学的なケーキに何のトッピングもせず、ロウソクも立てないで誕生パーティーをやっている怪しい子供たちの家には不用意に近付かないことです。

長野といえば、やっぱりミズスマシよりざざ虫だ!!

スノーレッツ誕生秘話 ヌマヌルねこ

*ものすごく偉い洋画壇の巨匠

*プルトくん…動燃のマスコットキャラクター

お楽しみ漫画クイズ

―問題編―

マヌルねこ

さて、いよいよ次号は「漫画特集」ということで、私も読者の皆さんに漫画に関するクイズを出題することにした。はっきり言って難問である上に、全部わかったところで少しも偉くないどころか、むしろ変人の烙印を押されること請け合いといった類のものである。しかも成績優秀者には後に挙げるような割に合わない賞品が出るという駄目押しつきだ。さあ、報われない人生経験を積みたいと思う人はレッツ・チャレンジ！

問題　作者と作品名の正しい組み合わせを作りなさい。

1：つのだじろう　　ア：ほんまにアホかいな！
2：ジョージ秋山　　イ：キツツキ　キッチョンチョン
3：田辺節雄　　ウ：切りさかれた青春
4：中本　繁　　エ：サイボーグエース
5：バロン吉元　　オ：幼年猿飛佐助
6：中島徳博　　カ：原人ビビ
7：小畑しゅんじ　　キ：ミサイルマン　マミー
8：日大健児　　ク：サル山番外地
9：手無　功　　ケ：ゲバ忠くん
10：白土三平　　コ：ラビット君
11：藤子不二雄　　サ：真紅のボウラー
12：笠間しろう　　シ：砂漠の鬼将軍
13：赤風閃一　　ス：建師ケン作
14：高橋じゅんじ　　セ：進め！　ドンガンデン
15：石川球太　　ソ：影忍
16：みなもと太郎　　タ：ドリーム仮面
17：斉藤　博　　チ：ジョウダン海賊
18：柳沢きみお　　ツ：現約聖書
19：一峰大二　　テ：ヌスット
20：宮谷一彦　　ト：リーゼントカバ
21：はたたいすけ　　ナ：球道武蔵
22：赤塚不二夫　　ニ：パンダラブー
23：横山まさみち　　ヌ：霧にむせぶ夜
24：北田正吾　　ネ：銀河戦士アポロン
25：野田たみ樹　　ノ：とうちゃんの無事通過
26：風　忍　　ハ：ベビーフード
27：久松文雄　　ヒ：太陽伝
28：斉藤あきら　　フ：ネオマスク
29：日野日出志　　ヘ：スーパーバイキング

30：松本正彦
31：空飛光一
32：梅本さちお
33：しがしずお
34：中島ザボウ
35：あすなひろし
36：山上たつひこ
37：ますむらひろし
38：中沢啓治
39：叶バンチョウ
40：北野英明

ホ：流星人間ゾーン
マ：ズンバラビン
ミ：さすらいちゃん
ム：少年王者
メ：ドッキリ仮面
モ：香港の水
ヤ：ゼロテスター
ユ：鉄面ネグロス
ヨ：腕白ドリム
ラ：4タロウ1ヒメ
リ：狂人軍

割に合わない賞品

全問正解者：心ウキウキ春の薫風検便セットの会（一名）
検便ケース（未使用品）と割り箸の嬉しい組み合わせ。嫌いな奴に本物の便をたっぷり詰め込んで送りつけるも良し、味噌を入れて恋人にプレゼントし、愛を試すも良し（この程度で怒るような相手なら、今のうちに別れたほうがいいぞ）、楽しみ方はあなたの工夫次第。

35～39問正解者：さくら銀行特製パラサのキーホルダー（一名）
頭の金具を肛門に刺し変えることもできるぞ！

30～34問正解者：いかがわしい新聞折り込み広告のセット（一名）
幸運をよぶグッズとか、儲かる話とかいうアレです。

以下は賞品なし（ひでえ！）

それでは左の解答用紙をコピーして編集部まで答を送ろう。締め切りは1997年6月30日。

住所（　　）

氏名（　　）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40

From Editor Jane

最近とみに、長野五輪のマスコット「スノーレッツ」のついた商品（とくに文房具）が増殖していますが、あまり売れている気配はありません。先日「薬物乱用根絶対策特別展」（警察博物館）で出会った薬物乱用防止運動のキャンペーン・キャラクター「ダメ。ゼッタイ。」君は、そのシュールなデザイン（顔と手足のついた地球で、野球帽をかぶり青いスニーカーをはいている）といい、安易なネーミングといい、なかなか光っていました（でも一番はやっぱりあの宇宙人のような風貌のピーポ君かな）。

次号はついに「まんが特集」です。本誌の読者はまんがとの関係が浅からぬ人が多いと思うので、ぜひ同封のアンケートにご協力ください。アンケートの締め切りは６月30日です。まんがに関わるさまざまな文章（まんがそのものでも可）、作家論や作品論などもあわせてお待ちしております。次号原稿の締め切りは７月17日、発行は８月中旬の予定です。長い原稿の場合、電子メールで送っていただくか、投稿の際にMS－DOS変換済みのフロッピーを同封していただけるととても助かります。

まんがといえば、アメリカの伝説的なアングラ・コミック作家ロバート・クラムとその家族を撮ったドキュメンタリー映画『クラム』がものすごくおもしろいのでおすすめです。渋谷ユーロスペースで上映中。　（玉蟲）

CRAZY JANE 第Ⅱ期 vol.11
1997.5.10

加入者名　「クレイジー・ジェーン」